連載：第９回

スライド 11 の解説（その 2）

レビー小体型認知症（DLB）では、意識消失発作がよくみられます。そのほとんどが、起立性低血圧によるものです。立ち上がる時に起きることが多いのですが、急な動作をした時にも、一過性に血圧が下がって、脳全体の血流が不足した状態となり、失神します。長くても数分で意識は回復することが一般的です。生命の危機の心配はありませんが、まれに他の疾患を合併していると、致死的な失神が起きることもあり得ますので、最初の失神が起こった場合には、失神を起こす他の病気が合併していないか、検査をすることが必要です。

DLB の起立性低血圧による失神は、次に述べる自律神経障害のために生じます。

DLB では、自律神経障害はほぼ必発の症状です。自律神経障害が最初の症状（初発症状）であることが多く、例えば、立ち眩み（起立性低血圧）、失神（起立性低血圧や神経反射性失神）、便秘、頻尿、発汗異常などが生じます。

頻度は少ないのですが、症状が起立性低血圧による失神だけの場合が長期間続くことがあり、この病態を「純粋自律神経不全症」と呼んでいます。純粋自律神経不全症を発症してから 16 年間も原因が分からず、その後に認知機能が低下して、やっと DLB と診断された症例を、私は経験しています（私が分からなかったのではありません。レビー小体病の超早期の段階〔前臨床期・前駆期〕で発見することが、私の得意技の一つです）。

このように、レビー小体関連の病理が原因でありながら、認知症がない状態（パーキンソン病や純粋自律神経不全症）があるので、これらを纏めて「レビー小体病」と呼びます。この名称を世界で初めて提言したのが、小阪先生です。

DLB の便秘の治療は重要です。DLB の便秘は、食生活が悪い・運動不足などでの便秘と違って、自律神経障害が原因です。軽視してほかっていると、巨大結腸症という大腸がパンパンに膨れ上がって、命に危険が及ぶ事態になることがあります。命の危険がない程度の便秘でも、内服薬の吸収を阻害しますので、毎朝の排便があるように治療するべきでしょう。

易転倒性とは、転びやすいことです。立ち眩みやパーキンソン症状（パーキンソニズム）のために転倒します。起立性低血圧やパーキンソニズムに対する治療が必要です。

連載第９回はここまでとします。また、来週、お会いしましょう。